



まちづくり研究所の活動・2016年度

曾我部 昌史* 内田 青蔵* 山家 京子* 中井 邦夫* 吉岡 寛之**
重村 力*** 丸山 美紀**** 長谷川 明**** 小幡 知之***** 香山 篤美*****

Report on Activities of the Town Planning Institute 2016

Masashi SOGABE* Seizo UCHIDA* Kyoko YAMAGA* Kunio NAKAI* Hiroyuki YOSHIOKA**
Tsutomu SHIGEMURA*** Miki Maruyama**** Akira Hasegawa**** Tomoyuki OBATA***** Atsumi KOYAMA*****

1. 2016年度からの活動

「まちづくり研究所」は、地域に残された歴史的建築物などの資産を生かして地域の活性化や住みよいまちづくりを実現することを目的として、2006年に故西和夫先生（神奈川大学名誉教授）が中心となって立ち上げられた。設立から今年で10年目を迎える。西先生の退職後は、山家京子、内田青蔵が代表を務めてきたが、2016年度からは曾我部昌史に担当を交代した。同年3月に退職した重村力は、引き続き工学研究所客員教授として関わることとなり、また、それぞれの建築設計事務所を構えながら本研究soの活動で共同をしていた丸山美紀と長谷川明が、あらためて工学研究所特別研究員として本研究soに加わることとなった。新たな体制のもとで、全国での、これまで以上に広い範囲での活動を後ろ支える受け皿としての役割を担うこととなる。

2. 新しい活動地域

体制が更新されたことに伴い、これまでの活動の中心であった長崎県平戸、山形県長井、長野県松代などといった地域のほかに、いくつかの新しい地域が加わった。本稿では、それらの中から曾我部、丸山、長谷川が関わる、徳島県美波町日和佐、愛媛県今治市大三島での活動の一端を紹介する。

3. 徳島県美波町日和佐でのまちづくり活動

徳島県美波町日和佐は、日和佐川河口付近に形成された県南の沿岸集落の一つである。第23番霊場・薬王寺やウミガメの産卵地・大浜海岸などで知られる。古くは、廻船業や漁業で栄え、歴史に培われた特徴的な民家群やそれらがつくる景観が今日に伝えられる。南海トラフ地震などに起因する津波被災も繰り返されており、東日本大震災以降再検討された津波の想定高さが以前より大きくなったため、避難計画などが調整されつつある。近年では、多くの町村と同様、高齢化と定住人口の減少が顕著であり、景観や震災対策と並行して、新たなまちづくり策の検討が急務である。



日和佐浦周辺

日和佐湾北側に広がる日和佐浦地区および薬王寺参道である桜町通り周辺が、活動の中心的エリアである。地域に残された歴史ある建物や景観を維持しながら、交流人口の増加や地域での暮らしの豊かさが得られるようなまちづくりを目指して、種々の活動が行われている。

今年度から特に注力している活動に、谷屋活用プロジェクトがある。谷屋は、明治7年に建てられた元廻船問屋の建物である。木造2階建てで、屋根の一部には本瓦葺きの部分も残る。出桁造りや鋸葺きといった地域固有の建築様式を有していると同時に、サンゴが練り込ま

* 教授 建築学科

Professor, Dept. of Architecture

** 特別助教 建築学科

Assistant Professor, Dept. of Architecture

***客員教授 工学研究所

Guest Professor, Research Institute for Engineering

**** 特別研究員 工学研究所

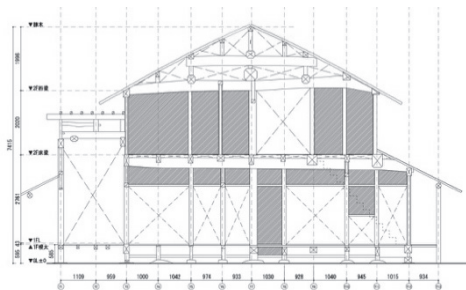
Research Fellow, Research Institute for Engineering

*****客員研究員 工学研究所

Guest Researcher, Research Institute for Engineering

れた床の間の壁や龍が描かれた和紙製の折上げ天井など、独特な設えも多くみられる。東側にはビリヤード場として用いられていた別棟もある。

所有者である谷氏との協議の末、谷屋を地域づくりの拠点として活用できることとなった。活用を具体化するにあたっては補修や耐震補強が必要であり、活用方針の検討や体制の構築と並行して改修設計を進めている。既存建物の実測調査などはほぼ完了しており、今年度内に耐震補強方針をまとめることを目指して、金箱温春氏(金箱構造設計事務所)との協議を重ねている。谷屋活用プロジェクト以外にも、桜町通りの景観形成策の検討などを進めている。また、丸山と長谷川が所属する移住促進のための組織(一社)アンドモアが古民家を活用した拠点づくりを行っていて、昨年度来、順調に件数を増やしており、用途のバリエーションも広がっている。



谷屋実測図(一部)

4. 愛媛県大三島でのまちづくり活動

大三島は、瀬戸内海西部に広がる芸予諸島のほぼ中央、愛媛県の北端に位置する島である。農業が主要産業で、近年は柑橘の生産を中心としている。かつては、大山祇神社や航路の多かった宮浦港を有する島西部(宮浦地区)に中心的な街区が形成されていたが、島東部(上浦地区)を縦断する瀬戸内しまなみ海道が開通した1999年ごろから急速に地域の活力を落としていった。往時には人が溢れていたという参道沿いには伝統的な様式を備えた古民家が残されているものの、今日ではほとんどが空き家となり、老朽化の進行が懸念される。

島では、2013年以降、伊東豊雄が主宰する伊東建築塾により「日本一美しい島・大三島をつくろうプロジェクト」が進められている。その活動に参加する共同メンバーとして、瀬戸地区(島東南部)の地域づくり、障がい者支援施設「さざなみ園」の改修、元鈴木菓舗の調査・保存などの活動を行っている。本稿では、それらの中から元鈴木菓舗の計画について紹介する。

元鈴木菓舗は、参道に残る最も古い建物である。木造二階建てで、間口6間、奥行4間の本体部分が参道に面し、南側に簡易なつくりの増築部分がある。今年度に入り所有

者の許可が得られたため、改修の作業に着手した。はじめに行ったのは、木部の腐朽が進行していた下屋部分の瓦下ろしである。改修工事の手順上、本体部分の屋根改修後に元に戻すため、清掃し保管している。その後、内部に残された荷物などを整理しながら、全体の実測調査を行った。



大山祇神社参道(点線部分)付近

建物の活用方針は決まらないものの、耐震性性能上の不安が大きかったため、セルフビルドでの耐震補強を行うこととし、構造エンジニアの金田充弘氏(東京藝術大学)との協議を重ねながら、作業を進めた。2階床と棟位置の壁面補強を中心に構造用合板などで強度を上げることとし、8月中旬までに予定していた最低限の補強を済ませることができた。また、土間上部を吹き抜けとした上で、菓舗時代の家具を整理して配置し直し、建物の様子をうかがえるようにしている。現在は、棧瓦土葺きの屋根の葺き替え、下屋の補修と瓦の葺き直し、南側増築部の撤去など、工業者者に作業を依頼するための準備を進めている。



改修後の元鈴木菓舗土間部分

3. 今年度後半以降の活動予定

今年度後半からは、横浜市閩内エリアでの活動をより深めるために、エリア内に残される防火帯建築の一つである住吉町新井ビル内に拠点を設ける予定である。

本稿で触れた2地域以外でも様々な活動が進行している。具体的な内容については、来年度以降の所報などで報告していきたい。